

〈50周年記念号に寄せる〉 人文学研究所の設立50周年によせて

孫 安石

自然界のでき事とは別に、一つの物事が50年という長きにわたり継続されることは容易なものではなく、多くの方々の協力がなければなかなか難しい。

今回、人文学研究所の設立50周年を迎えるにあたり、人文学研究所の運営を担っている常任委員会の協力を得て、50周年を記念する講演会と所報の特集号など関連行事を準備することになり、歴代の講演会の題名と『人文学研究所報』の総目次を点検する機会があった。講演者や執筆者のなかではすでに物故者になった方もいれば、思いもよらない論考に驚きの発見もあったが、中でもとくに、所報の創刊号（1965年）に掲載された「発刊のことば」を読みながら色々なことを考えた（本号の目次を参照）。

この「発刊のことば」が述べている主旨は、西洋近代文明を摂取して形成された日本の近代文明が直面した最大の課題は「近代の超克」という問題であり、東洋文明を具現した日本こそが、来るべき新しい世界文明の橋渡し役を担うことができるという使命感を自負しているところであった。しかし、そこから50年が経過したいま、日本が直面している現実はこれよりはるかに厳しい問題を突き付けられているように思える。すなわち、冷戦の真只中で、日本と「日本民族の学術的使命」を声高く闡明した時期から、いまは冷戦の崩壊とEUの成立と混乱、そして、9・11以降の世界が直面したテロという恐怖、さらには世界の経済動向を牽引する存在として浮上してきた中国の台頭、3・11の災害に前後して日本が直面した福島原発問題等々、日本が克服すべき課題は容易ならざるものであることがよく分かる。

この現代社会をどのように表現するかは人によって千差万別であろうが、私はいまの日本を含む世界が「競争」社会の到来に突如投げ出され、その対応に右往左往しているか、のように思える。もちろん、この「競争」は従来、西洋文明が優位を占め、すべてのルールをほぼ独占的に決めてきたものであるから公平な競争であったわけではない。たとえば、近代以降においてはイスラム文明、インド文明、中国文明などは常に不公平に甘んじることを強いられ、また、いま現在も公平な競争が保障されているわけではない。しかし、我々は、以前に比べればより多くの選択と機会に恵まれ、より対等な条件で競争できる環境に恵まれていることも間違いはない。ある国や一部の都市、または少数の人々はこの競争をきっかけに、大いに飛躍することに成功したし、ある一部の人々はこの競争が依然として不公平であることを主張して止まない。しかし、この競争という生存原理が今しばらくは我々の行動規範として長きに渡り生き残るだろうことも否定できない。

時は流れ、いまは毎日の新聞報道では、尖閣列島をめぐる領有権の問題や中国、韓国との歴史問題、福島原発問題、格差や秘密保護法などが取り上げられ、いかなる選択で「競争」を勝ち抜くか、が報じられている。一昔前であれば、文史哲という人文学の確固たる領域を盾に、象牙の塔に安住することも可能であったが、いまはそのような贅沢は望むべくもない。しかし、その一方で我々が日々、継続し、蓄積してきた人文学の研究と教育の成果は、きっとその他の学問の背景として大いに役に立っていることもまた、固く信じていたい。

人文学研究所の母体をなす外国語学部もいまは組織の改編がなされ、人間科学部が加わり、より多彩な人材を抱え、活動の幅も以前に比べれば一段と広がった。人文学研究所の主な活動は、(1) 人文学に関する研究及び調査、(2) 研究資料の収集及び整理、(3) 研究及び調査成果の発表のための刊行物の発行、(4) シンポジウムや講演会開催などを中心とするものであるが、これらの諸活動は所員の皆さまの協力を得ながら今後も続ける他はない。